

## 野良猫の系譜



鹿児島島の気候は劇的という表現に相当すると思う。くると大きく変化すると、それがまた極端なのだ。モダレートという言葉は無縁な地だとつくづく思わずにはいられない。それにまた、この山北の地は平地より大陸的気候要素が加わるからたまらない。

梅雨寒に炬燵を仕舞ったのを悔やむ翌日はカンカン照りで、アツパツパー一枚で扇風機を取り出す。また梅雨寒が来る。その雨も余所なら大騒ぎするような激しさで、それがまたケロリと上がる。おまけに台風の本メッカと来ている。この地の夏は、慣れぬ者には体力の要る季節で

ある。

この所の暑さに若い真つ黒の野良猫が死んだ。私の知るかぎりこの六年間に四代目の野良猫である。東京より猫の寿命が短いのは、この過酷な気候のせいだと思つ。

八年前私は東京から二匹の猫を連れて来た。どちらも家の近くで拾つた鼠くらの子猫を子供たちが育てたもので、一匹は一才、もう一匹は飛行機に乗るとき私のポケットに入つて検査を通過したほどの小さい猫であつた。どちらも思い出深い猫であるが、避妊手術の後遺症でてんかんを起すようになった雌のチビの方が一昨年姿を消した。てんかんの薬のせいかぼんやりうずくまって、夫にオシッコの失敗を叱られてばかりの毎日だつた。

兄貴分の方もこの二月に枯れ葉を背中にいっぱい付けて現れたのが最後であつた。九才になる前だつた。ノルウェイジャンフォレストとい

う寒い地方の種だったから、そのふさふさとした暖かそうな毛はこの地にはふさわしくなかったよ。風貌は王者のような風格があり、賢くて人におじず、爪を出すことなどなかった。家猫としてのDNAがしっかり組み込まれていたと思う。

今我が家では彼の娘と孫、娘の異兄弟とまるつきり野良猫の子の四匹を飼っている。どの猫にも罪作りをしないで済むようにと避妊手術をさせた。異論があるかもしれないが私はこうするより仕方ないと思っている。

移転して二二年は、私も猫も殆ど家の中で過ごしていた。兄貴分の猫は二年目の春に発情して一日の三分の二は外で雌を追うようになった。そのうち野良ながら器量良しで賢いな鯖猫の奥方が出来た。子猫が生まれ庭先をころころ遊んでいたが、ある雨の日車庫で二匹が死んでいた。ふかふかした毛の子猫は驚く程軽かった。栄養

失調ということ、残りの二匹の雌の子猫は、母猫から苦心して離し、獣医から買ったミルクで私が育てた。

二年目の秋、茅門饅頭の作業場が庭先に出て、私たち夫婦はそこまで往復するようになった。すると痩せた黒っぽい野良猫が馴れ馴れしく足にまとわるようになった。追いつけても寄って来る。菓子材料店のお兄さんの足に身をなすりつけるので、彼は我が家の飼い猫と勘違いして抱き上げたりする。

「ダメよ。それはノラだから汚いのよ」と言ったが、彼は根っからの猫好きで気にしなかった。私もついに一日一回我が家の猫の食べ残しを外に出してやるようになった。それが全ての間違いのもとであった。

いつか痩せて何とも不器量という他はない茶と黒の混ざった雌猫とその娘らしい同じようなブスで黒色の多い雌猫が加わった。三匹分には

少ない量のカリカリの餌を食べ終わると何処かに姿を消す。やがて最初の黒猫が現れなくなつた。もともと元気な猫ではなかつたから何処かで死んだのだらうと思つた。

春になつた。黒っぽいブス猫が物置と作業場の間で子猫を生んだ。同じようにお腹が大きかつた茶ブスはいつの間にかお腹がへこんでいたが自分の子猫はどうしたのか、娘の子猫に交代で授乳していた。しかし梅雨寒のある日、歩き始めた子猫の四匹のうちの三匹が、我が家の軒先に濡れうごめいていて、母猫はおろおろと行つたり来たりするばかりであつた。一匹は死んでいて、一匹にミルクをやつたのだが、育つたのは一匹だけだつた。

実はその当時の我が家の中では、奥方野良と娘二匹がともども子猫を生んで大騒ぎだつた。三匹の母猫は協同保育をするようになっていたから、外の野良の子が一匹紛れ込んでもおおら

かに授乳してくれた。その幸運の野良の子が今も家猫となつて収まつている。

野良母に残された一匹の子猫は、腹と足の白い黒猫で緑の目のきれいな雌猫であつた。さもしい猫で、餌をやると母猫とバアチャン猫の頭を手で叩いて、真先にガツガツと食べる。上目遣いで用心深く私の顔を伺つて、手を出せばさつと逃げる。根っからの野良根性で、ついに懐くことはなかつた。

この黒猫は翌年早々と母親になつた。三月初めの寒い季節で、私は段ボール箱にタオルや古セーターを入れて作業場と物置の間に置いてやつた。白と黒二匹の母となつたやんちゃ猫は、大変な母性愛の持ち主だつた。

白猫は澄んだラピスラズリのようなきれいなブルーの目をしていて、ペルシャ系なのだろうか。母猫のいない間に抱き上げてもおおじることもないし、爪を出すこともない。この種も長い

飼い猫の歴史がDNAに組み込まれているようだった。

一方黒猫は全身が黒の日本猫で、母猫に似て警戒心が強くすぐに隠れる。これは野良のDNAに違いなかった。

八月、白、黒の子猫を生んで五カ月経ったかと思う頃、緑目の若い母猫が何処かであまた子猫を生んだ様だった。しかし猛暑の中では体力がもたなかったのだろう。いつしか現れなくなつた。その前の何日か、私はその猫がやつれた体に足に血をにじませて餌入れに来て食べているところを見かけていた。それは何か雄猫にもてあそばれている遊女のようにさえ思えた。一年半の命であった。

緑目猫の母親のブス黒も九月過ぎに痩せてよろよろしているのを見かけたが、四日ほど留守をして帰ってみるといなくなつていた。餌の手当では十分にしておいたのだが。

この辺りは野良猫がやたらに多いように思つのだが、雄猫の多さとこの厳しい山北の気候が増加を調節しているのだろうか。

白いベルシャと黒猫は餌時には裏口のドアで待つようになつた。白猫は私が時々抱き上げて撫でてでもされるままになっている。雄猫で、子猫の時は純白だったが、大きくなるにつれて耳と尾っぽが黒ずんで来た。しかし目の青さは変わらなかつた。この猫も正月を過ぎた頃になくなつた。誰にでも抱かれるから、誰かに連れ去られたよつた。

茶フスのバアチャンと真つ黒の曾孫猫が残つた。今年の暑い五月、気がつくくとバアチャン猫も姿を現さなくなつた。黒猫は勝手口でニャアニャアと餌をねだるようになった。妊娠したよつだつた。私は多めの量を二回与えていたが、耳の辺の毛が薄くなつていた。

七月始め、劇団シシンの創作劇に活躍中の泰

平寺の若い和尚さんが篝火のセツトを一つ借りたいという。私は車庫のつもりで建てたのだが、今は新能の舞台や道具で一杯になってしまった物置の戸を開けた。すると何かが走り隠れるのが見えた。何と黒猫が物置の中で子猫を生んで育てていたのだ。屋根と扉の隙間から出入りしていたらしい。

もう生後一カ月は経っている様子だった。母乳だけで育てきれない頃だ。ころころと遊んでいた子猫が、栄養失調でパタリと死ぬのを毎年見ている。私は物置の扉を開けて、子猫の出入りが出来るようにした。

子猫は三匹で、私を見るとさっと物置に逃げ込む。私はカリカリの餌を物置の陰に置いた。母猫と一緒に子猫も食べ始めた際に、夫に物置を閉してもらった。

この黒猫も母性愛が強く、猫可愛がりという言葉通り三匹を次々になめ回して、乳を含ませ

る。しかし物置でそこまで育てた間に体力は相当消耗していたに違いなかった。

一三日した朝、子猫は二匹になっていた。烏に食べられてしまうのかもと思うが、栄養失調死なのかもしれない。梅雨寒の雨の朝、もう一匹が車の後ろで死んでいた。夫がシャベルで竹藪に埋めた。

猛暑の日が続いた。おやと思ったのはいつも餌をねだっていたのに、前日の餌が食べ残してあったことだった。弱っていた猫に連日の猛暑は耐えられなかったようだ。

私たち夫婦は、例年信州で行う全戦没者慰霊祭のため四日ほど家を留守にせねばならない。家猫には餌を一個の洗面器に一杯入れて寝室に置いておく。いつもは野良用にバケツに入れて外に置くのだが、見ると母猫は息も荒く動けないようだった。しかし近寄るとにじむようにして逃げよつとする。この様子ではきつと留守中

に死ぬだろうと思われた。それでも餌を入れた容器を一個は下に、一個は子猫用にと子猫の隠れる柵の上に置いた。

四日目に帰郷すると、隣の主人が自分の庭に黒猫が死んでいたので捨てたと言った。餌入れを覗くとふやけた餌が残っていた。

翌朝、ミヤアミヤアとかわいい声がするのでドアを開けると黒白の子猫が車の下にさつと隠れた。子猫は生きていたのだった。

トレイに一握りの餌を入れて外に置く。窓から見ていると走り寄って、用心深く周囲を見回してから食べている。死んだ兄弟はグレーの柔らかな毛の猫だったが、これは祖母と同じ白黒で、鼻先が墨を下手にポチョンと付けたようだが目は緑ではないしおかしな顔である。この猫も野良のDNAで私に懐くことなく餌だけもらって外で生活するのだろう。雌ならば祖母、母のよつに来春には子猫を生み、若くして死ぬ運命

かもしれない。

もし雌ならば何とかして避妊手術をさせ、子猫の死、親猫の死の循環をここで断ちたいと思ふ。がそれは、自身の長命と引き換えに野良のDNAの種の断絶になる。たかが猫だが命の問題は考えると大変な難題である。

